

あひると猿

寺田寅彦

青空文庫

去年の夏 信州 沓掛駅に近い湯川の上流に沿うた谷あいゆかわの星野温泉ほしのおんせんに前後二回合
 わせて二週間ばかりを全く日常生活の煩わづらいから免れて閑静に暮らしたのが、健康にも精神
 にも目に見えてよい効果があったように思われるので、ことしの夏も奮発して出かけて行
 った。

去年と同じ家のベランダに出て、軒にかぶさる厚朴ほおのきの広葉を見上げ、屋前に広がる池
 の静かな水面を見おろしたときに、去年の夏の記憶がほんの二三日前のことであつたよう
 によりがえつて来た。十か月以上の月日がその間に経過したとはどうしても思われなかつ
 た。信州における自分というものが、東京の自分のほかにもう一つあつて、それがこの一
 年の間眠つていて、それが今ひよつくり目をさましたのだというような気がするのであつ
 た。

このように、すべてのものが去年とそっくりそのままのようであるが、しばらく見てい
 るとまた少しずついろいろの相違が目について来るのであつた。たとえば池のみぎわから
 水面におおいかぶさるように茂つた見知らぬ木のあることは知っていたが、それに去年は
 見なかつた珍しい十字形の白い花が咲いている。それが日比谷公園ひびやこうえんの一角に、英国より寄

贈されたものだという説明の札をつけて植えてある「花水木はなみずぎ」というのと少なくとも花だけはよく似ているようである。しかし植物図鑑で捜してみるとこれは「やまぼうし」一名「やまぐわ」(Cornus Kousa, Buerg.) というものに相当するらしい。

とにかく、わずかな季節の差違で、去年はなかったものが、今突然目の前に出現したように思われるのであった。不注意なわれわれ素人しろうとには花のない見知らぬ樹木はだいたい針葉樹と扁葉樹へんようじゆとの二色ふたいろぐらいか、せいぜいで十種二十種にしか区別ができないのに、花が咲いて見るとそこに何か新しい別物が生まれたかのように感じるものらしい。無理な類推ではあるが人間の個性も、やっぱり何かしらひと花咲かせてみないと充分にその存在がはつきりしない、あれと同じだというような気がするのである。

去年の七月にはあんなにたくさんに池のまわりに遊んでいた鶴せきれいがことしの七月はさっぱり見えない。そのかわりに去年はたった一匹しかいなかったあひるがことしは十三羽に増殖している。鴨かものような羽色をしたひとつがいのほかに、純白の雌めすが一羽、それからその「白」の孵化ふかしたひなが十羽である。ひなは七月に行った時はまだ黄色い綿で作ったおもちやのような格好で、羽根などもほんの琴の爪つめぐらいの大きさの、言わば形ばかりのものであった。それでも時々延び上がって一人前らしく羽ばたきのまね事をするのが妙で

あつた。麦笛を吹くような声でピーピーと鳴き立ててはベランダの前へ寄つて来て、飯の余りやせんべいの欠けらをねだるのである。それからまた池にはいったと思うとせわしなく水中にもぐり込んで底の泥をくちばしでせせり歩く。その水中を泳ぐ格好がなかなか滑稽こっけいで愛敬あいぎやうがあり到底水上では見られぬ異形の小妖精しょうようせいの姿である。鳥の先祖は爬虫はちゆう虫だそうであるが、なるほどどこか鰐わになどの水中を泳ぐ姿に似たところがあるようである。もつとも親鳥がこんな格好をして水中を泳ぎ回することは、かつて見たことがない。この点ではかえつて子供のほうが親よりも多芸であり有能であるとも言われる。親鳥だと単にちよつと逆立ちさかだをしてしつぽを天に朝ちやうしさえすればくちばしが自然に池底に届くのであるが、ひな鳥はこうして全身を没してもぐらないと目的を達しないから、その自然の要求からこうした芸当をするのであろうが、それにしても、水中にもぐっている時間を測つてみるとやはりひな鳥のほうが著しく長い、大概七秒か八秒ほどの間もぐつて水底を泳ぎ回っているのに、親鳥のほうはせいぜい三四秒ぐらいでもう頭を上げる。これはたしかにひなと親鳥とではその生理的機能にそれだけの差があることを意味するのではないかと思われる。

鴨羽かもはの雌雄夫婦はおしどり式にいつも互いに一メートル以内ぐらいの間隔を保つて遊ゆぶ。

てしている。一方ではまた白の母鳥と十羽のひななどが別の一群を形づくって移動している。そうしてこの二群の間には常に若干の「尊敬の間隔」が厳守せられているかのように見える。ところがある日その神聖な規律を根底から破棄するような椿事ちんじの起こったのを偶然な機会で見撃することができた。いつものように夫婦仲よく並んで泳いでいたひとつがいの雄鳥のほうが、実にはなはだ突然にけたたましい羽音を立てて水面を走り出したと思うとやがて水中に全身を没してもぐり込んだ。そうしてまっしぐらに水中をおそらく三メートル以上も突進して行って、静かに浮かんでいる白の親鳥のそばに浮き上がったかと思うと、いきなりその首筋に食いついて、この弱々しい小柄の母鳥のからだを水中に押し沈めた。驚いて見ていると、この暴君はまもなくこの哀れな俘虜ふりよを釈放して、そうしてあたかも何事も起こらなかつたように悠々ゆうゆうとその固有の雌鳥の一メートル以内の領域に泳ぎついで行った。善良なるその妻もまたあたかもこの世の中に何事も起こらなかつたかのように平静な態度でこの不倫の夫を迎えたのであった。一方ではまた、突然の暴行の後に釈放された白い母鳥も、ほんのちよつとばかり取り乱した羽毛をくちばしでかいつくろつて、心ばかりの身じまいをしただけで、もう何事もなかつたように、これも瞬間の驚きから回復したらしい十羽のひなを引率してしずしずと池の反対の側へ泳いで行くのであつ

た。離婚問題も慰藉料問題も鳥の世界には起こり得ないのである。

自分の到着前には雄が二羽いたそうである。その中の一羽がむやみに暴戾で他の一羽を虐待する。そのたびに今もいる鴨羽の雌は人間で言わば仲を取りなし顔とでもいったような様子でそば近く寄って行って、いつもとは少しちがった特殊な低い鳴き声を発していたそうであったが、そのうちにある日突然その暴君の雄鳥の姿が池では見られなくなったそうである。たぶん宿の廚の料理人が引致して連れて行ったものらしく、ともかくもちようどその晩宿の本館は一団の軍人客でたいそうにぎやかであったそうである。そうしてそのときに池に残された弱虫のほうの雄が、今ではこの池の王者となり暴君となりドンファンとなつているのである。

七月末に一度帰京してちようど二週間たつて再び行って見て驚いたのはあひるのひなの生長の早いことであつた。あの黄色いうぶ毛はいつのまにか消えうせて、もうそろそろ一人前の鴨羽に近い色彩の発現が見える。小さなブーメラング形の翼の胚芽の代わりにもう日本語で羽根と名のつけられる程度のものが発生している。しかしまだ雌雄の区別が素人目にはどうも判然としない。よく見るとしつぽに近い背面の羽色に濃い黒みがかつた縞の見えるのが雄らしく思われるだけである。あひるの場合でもやはりいわゆる年ごろに

ならないと、雌雄の差による内分泌の分化が起こらないために、その性的差別に相当する外^{がい}貌^{ぼう}上^{じょう}の区別が判然と分化しないものと見える。それなのに体量だけはわずかの間に莫^{ばく}大^{だい}な増加を見せて、今では白の母鳥のほうがかえってひなの中の大柄なのよりはずつと小さく見えるくらいであった。一方で例のドンファンの雄鳥はと見るとなんとなく羽色がやつれたようで、首のまわりのあの美しい黒い輪も所まだらにはげちよろけているのであった。なんだか急に年を取ったように見える。こうした変化がたった二週間ばかりの間に起こったのである。浦^{うら}島^{しま}の物語の小さなひな形のようなものかもしれない。

植物の世界にも去年と比べて著しく相違が見えた。何よりもことは時候が著しくおくられているらしく思われた。たとえば去年は八月半ばにたくさん咲いていた釣^{つり}舟^{ふね}草^{そう}がことしの同じころにはいくから見つからなかった。そうして九月月上旬にもう一度行ったときに、温泉前の溪^{けい}流^{りゅう}の向こう側の林間軌道を歩いていたらその道ばたにこの花がたくさん咲き乱れているのを発見した。

星^{ほし}野^の滞^じ在中^{ちゆう}に一日^{いちにち}小^こ諸^{もろ}城^{じょう}趾^しを見物に行つた。城の大手門を見込んでちよつとした坂を下つて行くのであるが、こうした地形に拠^よつた城は存外珍しいのではないかと思う。

藤村庵とうそんあんというのがあって、そこには藤村氏の筆跡が壁に掛け並べてあったり、藤村文
 献目録なども備えてある。現に生きて活動している文人にゆかりのある家をこういうふう
 にしてあたかも古人の遺跡のように仕立ててあるのもやはりちよつと珍しいような気がす
 る。

天守台跡に上っているとどこかからすの鳴いているのが「アババ、アババ」と聞こえ
 る。こういうからすの声もめつたに聞いたことがないような気がした。石崖いしがけの上の端近
 く、一高の学生が一人あぐらをかいて上着を頭からすっぽりかぶって暑い日ざしをよけな
 がら岩波文庫らしいものを読みふけている。おそらく「千曲川ちくまがわのスケッチ」らしい。
 もう一度ああいいう年ごろになつてみたいといったような気もするのであった。

園内の溪谷けいこくに渡した釣り橋を渡って行くとき向こうから来た浴衣姿ゆかたすがたの青年の片手に
 さげていたのも、どうもやはり「千曲川ちくまがわのスケッチ」らしい。絵日傘えひがさをさした田舎いなかくさ
 いドイツ人夫婦が恐ろしくおおぜいの子供をつれて谷を見おろしていた。

動物園がある。熊くまにせんべいを買つて口の中へ投げ込んでやる。口をいっぱいにあいて
 下へ落ちたせんべいのありうる可能性などは考えないで悠然ゆうぜんとして次のを待っている姿
 は罪のないものである。自分らと並んで見物していた信州しんしゅう人らしいおじさんが連れの

男にこの熊は「人格」が高いとかなんとかいうような話をしていた。熊の人格も珍しい。

猿ざるの檻おりはどこの国でもいちばん人気がある。中に一匹腰が抜けて足の立たないのがいて、他の仲間のような活動を断念してたいいつも小屋の屋根の上でごろごろしている。それがどうかして時おり移動したくなるどひよいと逆立さかだちをして麻痺まひした腰とあと足を空中高くさし上げてそうして前足で自由に歩いて行く。さすがに猿だけのことはあるのであるが、とにかくこれもオリジナルである。

吸っていた巻き煙草たばこの吸いがらを檻の前に捨てたら、そこにしゃがんで見物していた土地の人らしいじいさんが、そのまだ火のついているままの吸いがらをいきなり檻の中へ投げ込んだ。すると、地べたにすわっていた親猿が心得顔に手を出して、手のひらを広げたままで吸いがらを地面にこすりつけて器用にその火をもみ消してしまった。そうしてその燃えがらをつまみ上げ、子細らしい手つきで巻き紙を引きやぶって中味の煙草を引き出したと思うといきなりそれを口中へ運んだ。まさかと思つたがやはりその煙草を味わっているのである。別にうまそうでもないが、しかしまたあわてて吐き出すのでもなく、平然ときわめてあたりまえなような様子をしてすましているのであった。これも実に珍しい見ものであった。ここの猿はおそらくもうよほど前からこうした「吸いがら教育」を受けてい

るのであろうと想像された。

絶壁の幕のあなたに八月の日光に照らされた千曲川ちくまがわ沿岸の平野を見おろした景色には特有な美しさがある。「せみ鳴くや松のこずえに千曲川。」こんな句がひとりでにできた。帰りに沓掛くつかけの駅ほしのでおりて星野行きの乗合バスの発車を待っている間に乗り組んだ商人が運転手を相手に先刻トラックで老婆がひかれたのを目撃したと言って足の肉と骨とがきれいに離れていたといったようなことをおもしろそうに話していた。バスが発車してまもなく横合いからはげしく何物かが衝突したと思うと同時に車体が傾いて危うく倒れそうになつて止まった。西洋人のおおぜい乗った自用車らしいのが十字路を横から飛び出してわれわれのバスの後部にぶつかつたのであつた。この西洋人の車は一方の泥どろよけがつぶれただけですみ、われわれのバスは横腹が少しへこんでペイントがはがれただけで助かつた。肥ふとつた赤ら顔の快活そうな老西洋人が一人おり立って、曲がった泥よけをどうにか引き曲げて直した後に、片手を高くさしあげてわれわれをさしまねきながら大声で「ドモスミマシエン」と言つて嫣然えんぜん一笑した。そうして再びエンジンの爆音を立てて威勢よく軽井かるいぎ沢わのほうへ走り去つたのであつた。

九月初旬三度目に行ったときには宿の池にやっと二三羽の鵓せきれい鳩たらいが見られた。去年のよ
うな大群はもう来ないらしい。ことしはあひるのコロニーが優勢になつて鵓鳩の領テリトリー域
を侵略してしまったのではないかと思われる。同じような現象がたとえば軽井沢のような
土地に週期的にやつて来る渡り鳥のような避暑客の人間の種類についても見られるかどう
か。材料が手に入るなら調べてみたいものである。

(昭和九年十二月、文学)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第五卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年11月20日第1刷発行

1963（昭和38）年6月16日第20刷改版発行

1993（平成5）年10月15日第61刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あひると猿

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>